

# 自閉スペクトラム症児者の心の理解



## ●腕一本、離れなさい

先日、岐阜で障害のある当事者の演劇集団「障がい者の」演劇を楽しむ会・劇団ドキドキわくわく」の舞台（題：「こえるよ 今を！」）を見ました。特別支援学校で女の子と一緒にいたら、先生に「男子と女子は、腕一本（腕を伸ばしても相手に触れない距離という意味）離れなさい」と強く教えこまれた男の子が主人公です。彼は卒業後、好きな女性ができます。一緒に食事に行きませんが、そこで向かい合って座ることのできる座席を探すのにとっても苦労します。なぜかといえは、隣り合わせの席だったら「腕一本離れる」ことにならないからです。それに対し、周りの仲間が、「好きなのになぜ腕一本離れなきゃいけないの？」と問いかける。彼は「そうしなきゃいけないって学校で言われたじゃないか！」と言いつつも、激しく混乱します。そんな彼が家族や仲間とのふれあいのなかで、好きだという自分の気持ちと好きな相手を大切にすることが一番大事であること、だから「腕一本離れる」必要はないことを受け入れる気持ちに至っていくというものでした。

この劇団は、障害のある当事者の悩みやねがいを聞き、一緒に考え話し合いながらそれをシナリオに練り上げます。男女が「腕一本離れる」という指導は、性のトラブルを起こさないためという名目で、近年特別支援学校でよく用いられます。そして自閉スペクトラム症の人には、このパターン化したわかりやすさがとても入りやすいのです。しかし彼・彼女らも同じ人間です。誰かを好きになることは当然あります。その際、このパターン化した理解が自分をしばってしまい、それによってとても苦しんでいる人がいることを教えられたのです。

これは、「一つのことを考えさせてくれました。一つは、「○の時は□する」とパターン化して教えることの



## 別府 哲 (岐阜大学)

べっぴ さとし/岐阜大学教授。自閉症児・者の発達や指導をライフサイクルを通して研究。著書に『自閉症児者の発達と生活ー共感的自己肯定感を育むために』『障害児の内面世界をさぐる』（以上、全障研出版部）など。現在、全国障害者問題研究会常任全国委員。

問題です。自閉スペクトラム症の人はこういった理解の仕方がわかりやすいため、それにしがった行動をとることはできるようになります。一方、自閉スペクトラム症児は、それを絶対なものと思い込みやすいところがあります。それが周りと新たなトラブルを生み出したり、本人を苦しめることがあるのです。わかってできるからよいのではなく、それがその人の一生にどう影響を与えるかを見通した、責任ある支援が必要なのです。

## ●突然スキンシップを求める

もう一つ、最も深く考えさせられたのは、自閉スペクトラム症児者にとつての人と「ふれあう」ことの意味です。以前から、自閉スペクトラム症児が思春期になって、周りの人に突然スキンシップを求めるようになるという相談を受けることがありました。これは知的に遅れのない人でもみられます。思春期は二次性徴が始まる時期です。身体が大人になるため、このことが性的問題として取り上げられやすいのです。「腕一本離れる」指導は、こういったことへの対応としても使われます。

4月号で紹介した知的に遅れない自閉スペクトラム症のヒロ君。彼は特別支援学校6年の途中から、急に先生やお母さんにスキンシップを求め始めました。大人の背中に乗ったり抱きつくのです。触覚過敏があった彼は、生まれてからずっと身体にふれる行動は極端に嫌がっていました。お母さんは、自分に対してでもスキンシップがないことを実はさびしく思っていました。だからこの変化はうれしかったのです。

でも家庭の外でそれをやることには、強い不安もありました。ヒロ君は体格のよいお子さんです。大人に抱きつくの知らない人を見ると驚くのではないか、ヒロ君がお母さんに抱きつくのを認めると、彼は外で見知らぬ人にも抱きつくのではないか、そう心配されたのです。

## 最終回 ふれあうこと、安心できること